



**アクセス**

**ACCESS**

道の駅鹿島まで

**【車でお越しの場合】**

◆佐賀市内より …… 約60分

《高速道路(長崎自動車道)利用》

福岡市内 …… **七浦** …… 長崎市内

約120分 約90分

◆武雄・北方 I.C下車 …… 約40分

◆嬉野 I.C下車 …… 約30分

**【JRでお越しの場合】**

◆JR長崎本線肥前七浦駅下車…徒歩約5分

《JR特急+祐徳バス利用》

JR博多駅 …… **JR肥前鹿島駅** …… JR長崎駅

約60分 約60分

**鹿島バスセンター** …… **海洋センター前** 下車

約15分

「県境」「糸岐本町」「中山」行きに乗車

# 七浦の歴史を歩こう

～ 屋根のないふるさと七浦博物館 ～



《有明海の初日の出と棚じぶ》

七浦地区は、佐賀県最高峰の経ヶ岳(1,076m)を中心とした多良岳山系から流れる河川によって、山すそに放射状の谷がいくつも形作られ、沿岸部の浦々に開けた平地にはそれぞれに集落が形成されてきました。

現在は12の区に分かれている七浦には、面浮立を代表とするたくさんの民俗芸能や、深い歴史と豊かな自然によって培われた、文化財・史跡・景観・味覚と観光スポットなどがあります。

また、七浦には浦々の集落を南北に縦断する「とんさん道」が今も残っています。多良海道の脇道でもある「とんさん道」は、海岸線沿いの道路や鉄道が整備される以前は、人々の生活には欠かすことのできない主要道路でした。途中、切り通しや崖があり、往時をしのぶことができ、道の分かれ道には必ずと言っていいほど、神社やお地蔵さんが見守っています。

このパンフレットを手に、ウォーキングがてら七浦の古い歴史を楽しんで下さい。



## 七浦道 (通称：とんさん道)

七浦道 (通称：とんさん道) は多良海道の脇道で、有明海に面した七浦の浦々を結ぶ幅三尺 (約90cm) の道です。最短距離で七浦を抜けることができますが、この道は、山は海に迫り、平野が少なく道は細く起伏<sup>きふく</sup> 厳しい<sup>きび</sup> 難路<sup>なんろ</sup> でもありました。

また、「とんさん道」とは言われていますが、残念ながら藩主<sup>はんしゅ</sup> クラス (殿様<sup>とのさま</sup>) が通ったという資料は残っていません。昔むかしのお殿様が作った道なのかもしれません。



緑のルートが「とんさん道」です。一部荒れている道もあります。

## 絵図で見る七浦



元禄肥前国絵図 (部分)  
(佐賀県立図書館蔵)

山間部を通る「多良海道」(浜町～矢答～北多良村)と、海岸線を通る「とんさん道」が記されています。当時の村として、西葉浦・母ヶ浦・塩屋浦・宮田尾浦・音成浦・加瀬浦・矢浦・飯田・伊福が描かれています。



伊能大図 (部分)  
(国土地理院蔵)

現代の地図ほぼ変わらない正確な地図です。文化9年(1812)、伊能忠敬の測量隊は北鹿島～鹿島～浜と測量したのち、10月26・27日の2日間、音成(浦)村に逗留したと記録が残ります。

藤津郡能古見郷図

飯田村・伊福村・江福村  
(佐賀県立図書館蔵)

嘉永4年(1851)の飯田・江福・伊福の集落を描いた絵図です。神社や寺院、家々のほか干拓や水路が詳細に描かれており、当時の村落景観を読み取ることができます。

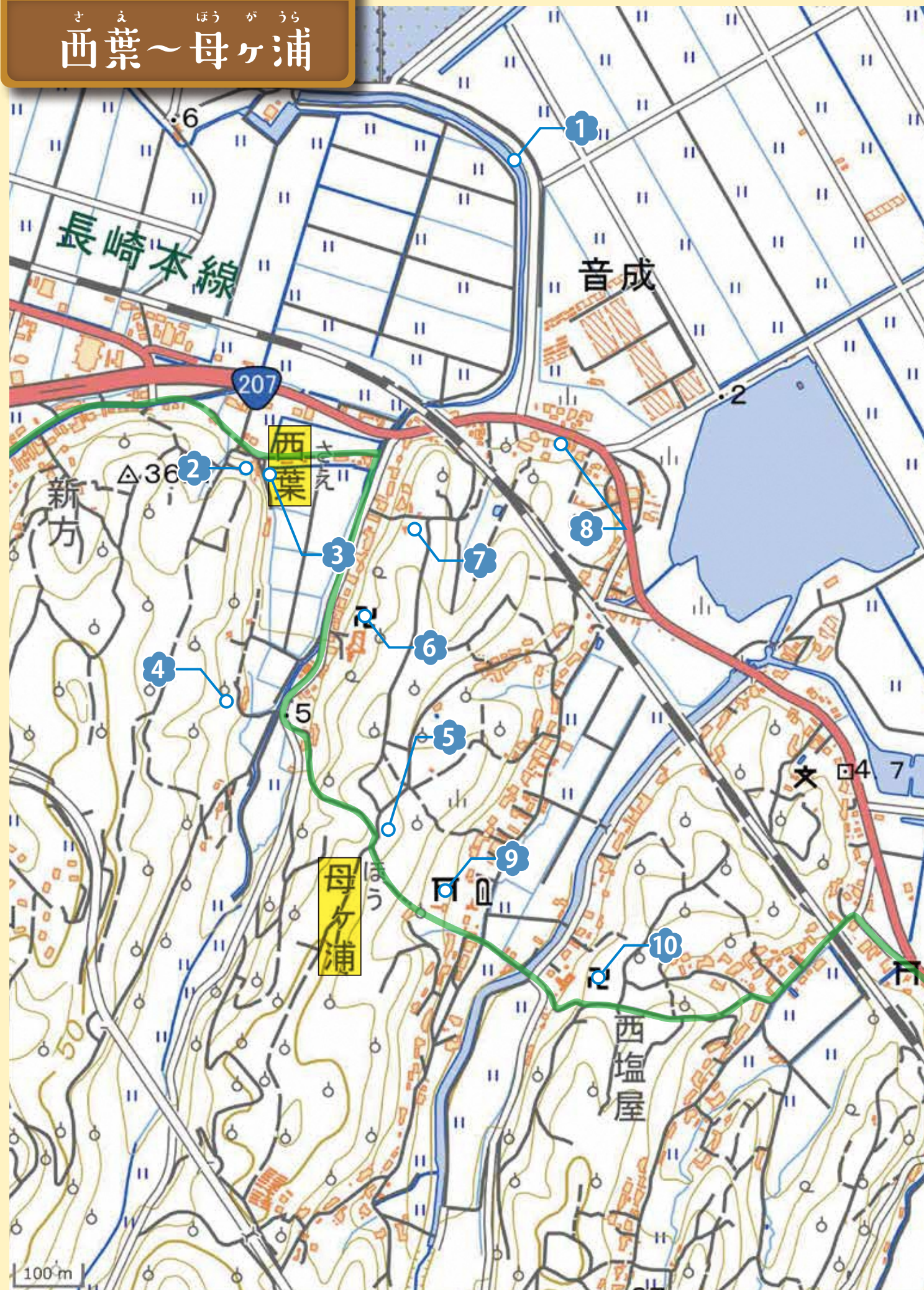


## みそ五郎伝説と十三峠

昔、この地方に「みそ五郎」という大男が住んでいた。「みそ五郎どん」は、多良岳に腰をかけ、有明海で顔を洗うという巨人で、時には雲仙にも腰掛にいった。

七浦の矢答を中心として放射状の丘陵の十三峠は「みそ五郎どん」が耕作していた、いも畑のうねに当り、「みそ五郎どん」が歩くと地形も変わり、足跡は小さな谷になったり、石には巨大な足跡がついたという。七浦小学校海岸付近の集塊岩<sup>かいがん</sup>からなる磯<sup>くぼ</sup>の中で、小凹地の部分も足跡という。

さ え ぼう が うら  
西葉～母ヶ浦



緑のルートが「とんさん道」です。一部荒れている道もあります。

さ え  
西葉

しょうほうくにえず  
正保国絵図(1650年頃作成)の絵図には「西葉浦村」と地名があります。

ひろさきりゅうげんじがらみ まえごもり かわにし としひら  
廣崎、龍源寺堀、前籠、川西、砥石平の5小字からなります。

とんさん道のスタート地点で、現在の道はほぼ同じです。

だい し  
2 お大師さん

弘法大師の像が  
なrandeいます。以  
前はここで、千灯籠  
も行われていまし  
た。



さえまえごもりおおかみ  
3 西葉前籠大神

神として祀られている巨  
石です。毎年11月25日にお  
祭り(大神祭)が行われます。



ろっかくちゅうとう  
5 六角柱塔 (1750年建立)

かんえん  
寛延3年(1750)建立、読誦の内容  
きょうてんくようとう  
を後世に伝えるための經典供養塔で  
す。「大乘妙典萬韻 漸読八千部童  
太寿叟・漸読二千部先師玉岡和尚  
南無釈迦如来 寛延三庚午十一月  
十日立」と刻まれています。



りゅうげんじ そうとうしゅう  
6 龍源寺(曹洞宗)

おうえい  
応永元年(1394)の開山と伝わります。キリシタン  
大名のありま馬氏が領有した時期に一時衰亡しましたが、  
のち初代佐賀藩主なべしまかつしげ鍋島勝茂によって、寛永年間  
(1624～1643)に再興されました。本堂にりゅうぞうじたかのぶ  
龍造寺隆信、なべしまなおしげ いはい  
鍋島直茂らの位牌が残っています。



りゅうげんじがらみ さえごもり  
1 龍源寺堀(西葉籠)

てんめい  
天明8年(1788)佐賀藩(西葉区)と鹿島藩  
(新方区)とが協力して20町歩(約20万㎡)の  
広大な干拓が行なわれました。干拓堤防の上  
には、さまざまな災害から守ってもらう願いを  
込めて、八大竜王社が祀られています。



さん みやだいみょうじん  
4 三の宮大明神

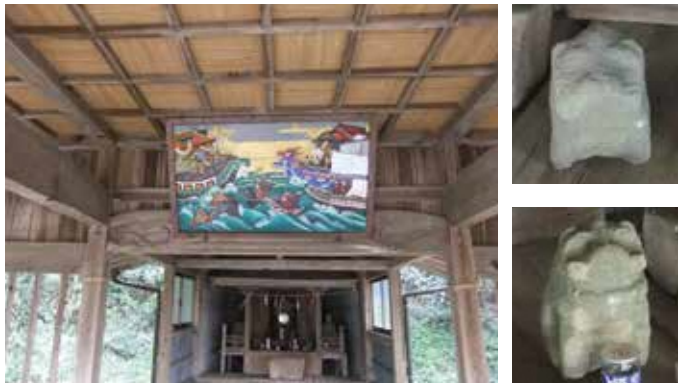
おうえい  
応永元年(1394)響外妙音と名乗る和尚が、  
ある夜「和尚の懷にいる蛇が出る所にお寺を  
建てよ。」との夢のお告げがあり、目が覚めると  
懷に小蛇が入っていました。西葉浦の三の  
宮で座禅をしていると小蛇が出て見えなくなり、  
蛇を探していると海岸にたくさんの材木が  
流れ着いていて、これこそ夢のお告げとこ  
こに小さなお寺を建てたと伝わります。  
現在は寛政6年(1794)の石祠が残っています。



## 7 てん し じん じゃ 天氏神社〈祭神 少彦名命 菅原道真〉

もとは天神宮と言っていましたが、明徳年間(1390～1393)に焼失、1500年代に再興しました。江戸時代には天氏宮と呼ばれるようになり、明治時代に社殿を改築し、現在の天氏神社となりました。社前にはかわいい肥前狛犬一対があります。

元寇の合戦を描いたと見られる珍しい奉納絵もあり、平成27年(2015)に修復されました。



## 8 いそ ご ぜん お磯御前さん

祠の中に、慈母が乳幼児を抱いている姿が刻んであります。この祠には次のようないわれがあります。

平家の落人の中に、乳児を抱いた御前さん(母親)がいた。御前さんは敵から逃れるため、磯の岩の中に隠れていたが、風邪を引いていた乳児は、苦しそうな咳をしたために、敵に見つかり、母子ともに殺されてしまった。御前さんは、「あの世から咳で苦しむ乳児を助けてやる。」と言って死んだという。

以前は、百日咳で苦しむ乳児をもつ母親の参詣が多く、参詣した母親は、七色のお菓子や、米をすった汁を乳代りに供えて願をかけ(お磯御前が乳不足であったから)、願いが成就すると、「願成就施主 何某」と書いて幕や小旗を寄進したそうです。



## ほう が う ら 母ヶ浦

天正2年(1574)、潮土居築造の折、染川盛政が風波転除の祈願をしたところ、無事に工事が竣工した。里人はこれは神の御神徳と御加護のおかげだと大変喜んで、開けた土地に民家も移転して繁昌した。そこで里の名を「宝ヶ浦」と呼ぶようになり、後に現在の「母ヶ浦」をあてるようになったと古い記録に残されています。

東ノ上・上草場・長田・下草場・籠・松尾平・御立場・西ノ上・西葉川内・花取・七浦新田の11小字からなります。

## 9 ちん じゅ 鎮守神社〈祭神 瓊々杵尊〉

瓊々杵尊を祀っています。由緒は良く分かっていませんが、天文2年(1533)に浜の松岡神社の社家であった染川氏が祀官となり、天正8年(1580)に社殿を改修、元禄2年(1689)と天保8年(1837)には社殿を改築しています。毎年9月の第2日曜日に、県指定重要無形民俗文化財の母ヶ浦の面浮立が奉納されます。



## ほう が う ら の め ん ぶ り ゅ う 母ヶ浦の面浮立(県重要無形民俗文化財)

母ヶ浦の面浮立は、鎮守神社の秋祭りに奉納されます。

鹿島市を中心として分布する面浮立は、大地を踏ん張る力足、虚空に描く力み手を主体とする悪霊鎮圧的な性格を有する芸能とされますが、母ヶ浦の面浮立は踏み歩みを主体とする勇壮な面浮立の代表的なものです。昭和52年に県指定重要無形民俗文化財に指定されました。

(写真:かけうち:波に碇綱模様の法被を着て、紅白のねじり糸のたすきがけ、白股引に黒脚絆、白足袋にわらじ履きで、手甲をつける。黄色の布でモリヤーシを腹部につるし、両手にバチをもって、シャグマをつけた鬼面をかぶる。)



## 10 ほう じゅ じ 宝聚寺(曹洞宗)

山門入口の六地藏は、天文・天正(1500年代)のものと思われます。明治7年(1874)、音成村小学校の東校を音成福泉寺に、西校をこの寺に創設し、音成村小学校教育の発祥の地となりました。



## 母ヶ浦に「松本」姓が多いワケ(宝聚寺)

母ヶ浦にある宝聚寺には、信州松代藩真田信幸(真田幸村の兄)の位牌、島原藩主高力忠房の遺骨を納めた仏像が安置されています。

高力忠房は、島原の乱後の荒廃した島原半島を統治し、善政をしいた名君でしたが、その子隆長は暗君だったため仙台の伊達家へお預けの身となりました。高力の家臣は、忠房の遺骨を納めた釈迦如来像と、忠房の妻の父真田信幸の位牌などを背負って悲痛な気持ちで島原を出発、長崎脇街道に入って第一の宿を母ヶ浦にとりました。家臣らは、仙台までの遠い道のりを思い、島原の菩提寺である禪林寺と同じ曹洞宗の宝聚寺に位牌を預けて菩提を弔うことにしました。

その後、母ヶ浦に土着した高力氏の重臣「松本又右衛門」によって宝聚寺は再建され、このことから、母ヶ浦には松本姓が多いと言われています。



## は な と り じん じゃ 花取神社〈祭神 花取大明神〉

花取堤の近くにある、熱病の神様として信仰されているお社で、次のような言い伝えがあります。

昔、近くの村人が花取さんに花を取りに来て、熱病に苦しみ意識を失った。その時、若い武士が目の前に現れて、「私は馬に乗って狩りをしている時、花取さんの沼地に落ちてなくなった。私の亡くなった場所に社を建てて祀ってくれたら、熱病を治してあげよう。」と言って消えてしまった。はっと気がついたら、夢から覚めたように熱病も無くなり苦しみも取れた。そこで、村人に相談して小さな社を建てて若者を祀った。

にししおや ひがししおや  
西塩屋～東塩屋



西塩屋の面浮立



にししおや  
西塩屋

慶長国絵図(1605年頃作成)には、塩屋と記されており、宝暦年間(1750年頃)には、東塩屋浦村・西塩屋浦村と見えます。西塩屋からは弥生中期の貝塚が発見され、土器・石器などが出土しています。  
古場城・松尾平・猪ノ木・狐谷・樋渡・池之頭・吉野・念田・草場・搦・西塩屋・土道の12小字からなります。

えぞえ おおくましのぶ  
11 江副家と大隈重信

大隈重信の最初の妻・江副美登の実家である江副家はここ西塩屋にありました。美登の弟廉蔵は、幕末に長崎でフルベッキに英語を学び、明治9年(1876)、アメリカ建国百周年を記念するフィラデルフィア博覧会に、有田の香蘭社の通訳として参加。その後、三井物産ニューヨーク支店主任として活躍。そして、帰国し、アメリカ煙草の直輸入で莫大な財産を築いた人物です。

美登は中央に出て行く重信にはついて行かず、重信と離縁しましたが、廉蔵と重信の交流は終生続きました。

にししお や かいつか やよいじだい  
12 西塩屋貝塚(弥生時代の「ゴミ捨て場」)

今から約2000年前の遺跡で、西塩屋地区の丘陵の先端、標高約30mのところに位置します。この遺跡は、弥生時代の「ゴミ捨て場」で、昭和42年に発掘調査が実施されました。貝殻の層が厚さ50cm、長さ20mにわたって形成されており、貝殻はマガキが大部分を占め、弥生土器と石器も出土しています。遺跡の近くからは弥生時代の甕棺も出土しています。



きゅう みち  
13 旧とんさん道

この道は、干拓前の「とんさん道」で、途中に江副家の墓があります。

てんまんぐう すはらのみちざね  
15 天満宮〈祭神 菅原道真〉

至徳元年(1384)の頃から、天神社と称する小祠が奉祀され、里民の信仰が厚く、その後、天文年間(1533～1554)に社殿が造営されました。境内にある蓋付壺形水盤一基(蓋は渦巻き状)は県内でも珍しい型です。



せきぶつ  
14 石仏



ひがししおや  
東塩屋

戦国時代の永禄5年(1562)、北高来郡伊佐早高城の城主西郷石見守宗雪と南高来郡原城の城主有馬義貞率いる有馬衆が、七浦村字東塩屋の峠で激突、名のある武将が討ち死にしたと東塩屋由来記に伝わっています。  
五畝田・植松・平原・下尾形・藤原の5小字からなります。

ちんじゅじんじや ことしろめのかみ しおや  
16 鎮守神社〈祭神 事代主命・塩屋某〉

天和2年(1682)潮土井築造の時、その工事の安全成功を祈請して勧請されました。同年8月に建てられ、明神鳥居はその工事の完工を喜び、氏子中から奉獻されています。

17 りゅうあんじ じょうどしんしゅう  
立安寺 (浄土真宗)

天正15年(1587)教周が建立しました。教周の俗名は植松藤左衛門うえまつ とうざえもんといって、七浦五十六人の咄おとたちの1人でした。  
有馬氏の兵士がこの地こゝにきてしばらく滞留し、佐賀を討とうと話しているのを聞き、急いで押し板にのって佐賀の鍋島氏に知らせました。その賞として仏像を頂いたので、剃髪して僧となり、名を教周と改めて、このお寺を建立しました。

18 ろくじぞう  
六地藏

19 あんようぜん じ  
安養禅寺 (跡地)  
(通称 あんにょんじ)

20 ごせ た こふんぐん  
五畝田古墳群

東塩屋の海岸に立地していた古墳時代後期後葉の古墳群で、七浦干拓の土取り工事中に発見され、昭和41年(1966)、42年(1967)に調査されました。調査された古墳は、横穴式石室墳4基と箱式石棺1基。副葬品は、勾玉・管玉・切子玉・耳環などの装身具と、鎌・斧・鏃・剣・刀などの鉄製品、須恵器・土師器など貴重な資料が出土しています。



東塩屋由来記 その1 (安養禅寺と右京・左京の松)

戦国時代。北高来郡伊佐早高城の城主西郷石見守宗雪は、北高来郡全部及び藤津郡東部を領有していた。この時、南高来郡原城の城主有馬義貞は既に牛津川以西五郡を攻略しており、西郷氏は有馬の指揮下にあった。永禄5年(1562)12月、西郷氏は有馬氏に叛いた。有馬義貞は西郷氏追討のため、その一族である有馬直治を遣わし、安德・深江及び藤津郡の諸将がこれに属した。12月28日、諫早梅津に陣を置いていた西郷石見守が突然打ち出て、有馬衆を打ちやぶり、勝ちに乘じて藤津郡に入った。糸岐の小田某・陣内某・伊福飯田の領主伊福刑部少輔・七浦の相馬中務・三ヶ島玄蕃守・同権守は、状況を見て西郷軍に加わり、有馬衆を七浦村字東塩屋の峠に追撃し、これを大いに敗った。大将直治を初め、名だたる武将が討ち死にし、残兵は狼狽して、浜の松岡城に退いた。この時に、西郷氏は家臣の塩屋某に命じて、戦死者を手厚く葬り、安養禅寺の住職が読経し、その上に松を植えた。道を挟んで松を植えたので、右京の松・左京の松という。台風でこの松が倒れたあと、この塚があばかれて、人骨・武具等多く出たという。

東塩屋由来記 その2 (塩屋の地名の由来)

永禄7年(1564)西郷氏は、塩屋某を代官とし、この地を治めさせた。この頃、七浦の里長小野兵右衛門以下56人が潮土井築立の請願をし、西郷氏は、塩屋某に工事を監督させた。しかし、完成間近になると、土井が崩れる。占ったところ、「この工事場に、草履の緒が左右違うものがある。この者を人柱にしたら工事が成就する。」と出た。そこで、その人物を探したところ、塩屋某がそうであった。塩屋某はその地の鎮守の神事代主大神にこの土井が成功することを願って、海に身を投げた。すると、これより災害に遭うことなく、工事は終わったという。西郷氏は塩屋某の死をいたみ、鎮守神社に相殿した。七浦の人民は、塩屋某の祭祀を怠らず、その徳を忘れないため、地名を「塩屋」とした。

こ みや どう おお みや た お  
小宮道～大宮田尾



緑のルートが「とんさん道」です。一部荒れている道もあります。

みやた おうむら  
**宮田尾浦村**(江戸期)

宮田尾浦村は、江戸時代の村名で、「みやのどう」ともいい、宮ノ道とも書きました。「慶長国絵図」(1604年頃作成)には宮道とあり、「浜ノ内」となっています。宝暦郷村帳(1750年代作成)には、大宮田尾・小宮道が宮田尾浦村の小村として記され、天明郷村帳(1780年代作成)では、二つの村が別々に書かれているので、その頃から、分かれていたと思われます。

大宮田尾にある、「宮崎神社」が宮崎郡大宮村の神様の分霊を勧請してできたことから、「みやのどう」と呼ばれるようになったと考えられますが、残念ながら地名については、何も由緒が残っていません。

こ みやどう  
**小宮道**

江戸時代は、小宮田尾とも書きました。宝暦郷村帳(1750年代作成)には、宮田尾浦村の小村とされており、天明郷村帳(1780年代作成)では1村となっています。

雨石・野畑・火荒・東小路・躑躅原・瘤佛・俵石・先館・西小路・龍王・左京・西平・柴原・赤面・瀬戸・大木庭・上館・芦ヶ谷・恵能・横道・新龍王・小浦の22小字からなります。小字名をみると、中世の地名を連想させるものが多く、古くからある集落ではないかと思われます。

りゅうおうじんじゃ  
**龍王神社**(綿津見神)

この地は谷が浅く、河川も乏しく水田が無かったため、漁業を生業とするものが多かったようです。

小野某という人が、慶長15年(1610)沖ノ島に鎮座の海神を勧請し、綿津見神社と称していましたが、元禄の頃(1688~1703)、八大竜王神社と改めました。明治25年(1892)11月に明神鳥居が奉献され、その後龍王神社と改称されています。



こ もり じ ぞ そんどう  
**22 子守地蔵尊堂**

この場所は元沼地で、海のそばだったので、子ども達がよく泳いでいました。ある時、溺死者が出て、子どもの災難を救う地蔵尊が祀られました。子どもたちはこの地蔵尊を浮き袋代わりにして泳ぎ、それから水死事故がなくなったので、いつの頃からか、「子守地蔵さん」と呼ばれるようになった。堂内には、2体の地蔵尊があり、横には、梵字が彫られた石碑と五輪塔の残欠も祀られていますが、名称・由来ともに不明です。



じ ぞう  
**23 お地蔵さん**



ふながたこうはい はんにくぼり ざ ぞう  
舟形光背付きの半肉彫坐像

どう まえ  
**24 堂の前**

以前はここを「堂の前」と呼んでいました。何かのお堂があったと思われますが、現在は何もありません。

こ みやどう き とお  
**小宮道の切り通し**



おみやだお(おおみやどう)  
**大宮田尾**

宝暦郷村帳(1750年代作成)には、宮田尾浦村の小村とされており、天明郷村帳(1780年代作成)では1村となっています。道角・小坂・源太郎・別當石・鎧田・秀城山・笹原・赤松・上次郎山・東宮田尾・中宮田尾・鬼塚・東大谷・西大谷・西宮田尾・新宮田尾・駄口の17小字からなります。小字名をみると、小宮道と同じく中世の地名を連想させるものが多く、古くからある集落ではないかと思われます。

みやざきじんじゃ  
**25 宮崎神社**(祭神 大宮乃売神)

永禄の頃(1559~1569)の有馬VS西郷の戦乱で兵火にかり、社家の旧記は燃えてしまいました。言い伝えによると、里長の小野某が日向国宮崎郡大宮村の祭神に参拝した際に、その尊い由緒に深く感動し、その分霊を勧請したといわれます。永禄5年(1562)、天氏神社の祠官染川盛忠が代官塩屋氏と議って社殿を再建しました。神社の裏には、元禄2年(1689)の太神宮、弘化5年(1848)の猿田彦太神の自然石塔2基のほか、石祠が2基あります。



てんまんぐう  
**26 天満宮**(祭神 菅原道真)

国道沿いの赤い鳥居をくぐって、高い丘に登ると、天満宮と書かれた赤い鳥居と石祠があります。由緒不明。



ろく じ ぞう ば とうかんぜ おん  
**27 六地蔵・馬頭観世音**

音成に向かう切り通しの登り口にある、六地蔵と馬頭観世音の石塔です。どちらも、銘は刻まれておらず、「肥前鹿島の石造文化」にも紹介されていない石造物です。馬頭観世音は自然石塔で、塔中央に駒形の花扉に「馬頭観世音」と彫られています。



みち えき か しま  
**28 道の駅鹿島**

千葉市では、自然の恵みを受けて丸々育った新鮮な旬の野菜や、有明海の美味しい魚介類などが売られています。美味しいスイーツもたくさん!! 干潟の体験もできます。



おとなり かせのうら  
音成～嘉瀬浦



肥前七浦駅



道の駅

肥前七浦駅

嘉瀬浦

緑のルートが「とんさん道」です。一部荒れている道もあります。

おとなり  
音成

「おとなし」ともいい、慶長国絵図（1605年頃作成）には「乙無」と書かれています。江戸時代はこの地に七浦の大庄屋があり、七浦の中心でした。また、地区にある「天子神社」の由緒は天平年間（729～748）までさかのぼります。

小字は、黒木・影平・柿総・東搦・中搦・西搦・中門・岩谷・城平・中嶋・のぼりたて・おごうち・じょうつの・おおわち・やなぎ上り立・小川内・城角・大川内・柳坂・黒仁田・山神・平尾・八王子・木庭・片峰・西平・平原・尻無尾・西浦・ながさきびら・ちんじゅうのえ・かびらのした・つるまん・だいすけ・こばまえ・よこはま・大助・木庭前・横浜の32小字です。

てんし じんじゃ  
29 天子神社〈祭神 瓊々杵尊〉

おやまつみのかみ たけみかつちのかみ ふつめのかみ すがわらのみちぎね  
〈合祀 大山祇神 武甕槌神 経津主神 菅原道真〉

神社がある場所は、かつては海岸に突き出た岬であったと思われる、小高い丘陵の突端に鎮座しています。祭神は瓊々杵尊でその創祀は古く、天平年間（729～748）に、日向国高千穂の大神を分祀したものと伝わっています。かつては日出岡社とも呼ばれ、相当な大社で七浦郷中の鎮守神として崇められていました。鎌倉時代の建保年間（1213～1219）には、相馬中務庄司という者がこの地に秀岡城を築き、神社を城の守護社とし天子宮と改めたといひます。

戦国時代、龍造寺隆信もこの神社を厚く信仰し、神楽料として山林を寄進しました。江戸時代には、佐賀本藩領となりましたが、今も神楽山と呼ばれる土地が残っています。秋には、県指定文化財の『音成の面浮立』が奉納されます。



おとなし めんぶりゅう  
音成の面浮立（県重要無形民俗文化財）



面浮立の起源として一説には、戦国時代に龍造寺配下の鍋島の手勢が、シャグマと鬼面をつけて奇襲し、その戦勝に踊ったのが始まりと伝わります。佐賀県下に面浮立は数多くありますが、中でも音成の面浮立は、大地を踏みしめる力足や、力み手などの所作など完成された面浮立として、当初の要素が最もよく伝承されています。昭和35年（1970）県指定重要無形民俗文化財に指定されました。（写真：かけうち：濃紺の木綿の襦袢を着て、股引をはく。濃紺のねじり糸のたすきがけ、首から黄色の太鼓つりを下げ、白紐を腰に巻いて固定する。）

なかむらよえもん やしき  
30 中村与右衛門屋敷（佐賀県遺産）

中村家は酒造業で財をなした家で、天子神社に残っているこの時代の石塔のほとんどは、「中村与右衛門」によって造られたものです。また、七浦のすべての人頭税（5,000人分、千両＝約6,000万円）を、与右衛門が立て替えたという記録や、造りが素晴らしい古い石塔などが現在も残っており、中村家の繁栄ぶりが伺われます。また、時代が下って中村家9代目の良兼は七浦村の初代村長で、貴族院議員にもなった人物です。その後も、寛治・良男と中村家は村長を歴任し、現在も七浦の人は尊敬の念を抱いています。この「中村家」は現在も白壁で囲まれた大邸宅が音成公民館の裏手に残っており、現在の建物は明治44年（1910）に建てられたもので、堀や門など往時をしのぶことができます。

令和元年に「22世紀に残す佐賀県遺産」に認定されました。



### 31 ふくせんじ じょうどしゅう 福泉寺(浄土宗)

文禄2年(1593)の開山。寺の入口の石段をのぼった左右には、天文8年(1539)銘と、永禄12年(1569)銘の六地藏石幢があり、どちらも福泉寺の創建より古いものです。

### 明治9年地租改正地引絵図 (市重要文化財・鹿島市教育委員会寄託)



平成24年(2012)に音成公民館から発見されました。長さ9m以上あります。現在鹿島市民図書館に保管されています。

### おとなし?おとなり?

音成は現在「おとなり」と呼ばれていますが、古い記録には「おとなし」と記されています。延久5年(1073)の年末に村中の人たちが集まっている時に、天変地異がおこり、皆は地にひれ伏し、神樂を行うなどしたが、嵐はおさまらなかった。そこで、神官が「この村には以後白馬を用いない」との祈誓をしたところ、雨も雷も止み、延久6年(1074)元日を迎えた。それで、みな「音なし」と喜んだことから、この地を「おとなし」と呼ぶようになったという。



明治9年地租改正地引絵図(音成・部分)

### 32 どうくつ 洞窟

### かせのうら 嘉瀬浦

江戸時代は、加瀬浦・賀瀬浦とも書き、慶長国絵図(1605年頃作成)にも村名を見ることができます。いっぽん にほん さんぽん し ほん ご ほん ろっぽん しちぽん はちぽん きゅうぽん じっぽん じゅういちぽん じゅうにぽん じゅうさんぽん じゅうしぽん じゅうごぽん 壱本・貳本・参本・四本・五本・六本・七本・八本・九本・拾本・拾壱本・拾貳本・拾参本・拾四本・拾五本の15小字からなります。数字だけの小字名は、鹿島では、嘉瀬浦と龍宿浦にあります。

### 34 どうろげんびょう 道路元標

道路元標は慶長9年(1604)に、東京の日本橋に全国に通じる諸街道の出発点として設置されたのが始まりといわれています。市内には、新町の佐賀共栄銀行の前と、浜町の浜大橋のたもと、嘉瀬浦の七浦村役場跡地の3ヶ所に残されています。嘉瀬浦のものは七浦村役場跡地の札がかかっている石柱の横に建っていて、「藤津郡七浦村道路元標」と刻まれています。



### 33 ちんじゅ じん じゃ 鎮守神社<祭神 武甕槌命・経津主命>

七浦農協の前の高台にあり、有明海が一望できる、静かで明るく見晴らしのよい所にあります。鳥居は明神鳥居で、享和元年(1801)の銘があり、水盤は元禄3年(1690)の銘がある小判型で県内でも珍しいものです。境内には、月夜見命をまつ祀った石塔が並んでおり、一番新しいのは平成18年(2006)年に建立されており、地区の人の強い三夜待信仰の記念碑として残されています。また、そばに小さなお堂があり、角の崖のところには、弘治4年(1558)の六地藏などがあります。後方の藪の中には、宝篋印塔や五輪塔の残欠があることから、古い庵跡と考えられます。



平成18年(2006)建立の月夜見命の石塔。  
全国でもとても珍しい事例。



神社裏の石塔群  
1700~2006年に建立されたものが祀られています。



六地藏  
弘治4年(1558)

### 35 みかしまげんぼのかみ 三ヶ島玄蕃之守

戦国時代この地を治めていた武将。有馬VS西郷の戦いの時に活躍した。東塩屋由来記に名前があります。



### 36 いど 井戸



### めいじ ねん ち そ かいせい じ びきえ ず 明治9年地租改正地引絵図 (市重要文化財・鹿島市教育委員会寄託)



明治9年(1876)の地租改正の時に作成された絵図。平成24年(2012)に民家から発見されました。長さは4m以上あります。土地台帳15冊(各小字分)も残っており、合わせて市の重要文化財に指定されました。現在は市民図書館に保管されています。

やのうら いいだ  
龍宿浦～飯田



肥前飯田駅



やのうら  
龍宿浦

江戸時代は、矢浦・龍宿とも書き、慶長国絵図（1605年頃作成）から村名を見ることができます。村名の由来は、小高い山腹にある洞穴に龍が棲みついていたことにちなみ、鎮西八郎為朝（源為朝）の伝説も残ります。また、昔古戦場としての海岸に弓矢が漂着した所を「矢ノ浦」としたという説もあります。

いっぽんまつい ちの かく いっぽんまつ に の かく いっぽんまつさんのかく いっぽんまつよんの かく からみ いっぽんまつつく の かく  
壺本松壺ノ角・壺本松式ノ角・壺本松三ノ角・壺本松四ノ角・壺本松六ノ角の6小字からなります。

数字だけの小字名は、鹿島では、嘉瀬浦と龍宿浦にあります。

やのうら しゅつどせっかん  
37 龍宿浦出土石棺

龍宿浦の丘陵地帯は古墳群であつたらしく、長崎本線の鉄道工事や、七浦小学校の敷地建設の際、多くの石棺が出土したと言われています。この石棺には、1体の遺体が埋葬されており、土師器の破片と遺体の頭部付近にマガキの貝殻が詰められていました。これは、約1500年前のものと推定され、現在は七浦小学校の敷地内に復元・保存されています。



おおあざおとなり おおあざ いいだ さかい  
38 大字音成と大字飯田の境  
(大きな石が目印)

おがみ めがみ  
39 男神と女神



おながみ  
42 御髪さん



ばんやまだいみょうじん  
40 盤山大明神

りゅうけつ  
41 龍穴

地名の由来となっている「龍が棲んでいた」と言われている穴。昔は上まで通じていたといひます。



し ぜん せきとう  
43 自然石塔

龍穴のすぐ近くに祀られている自然石です。周囲には、宝篋印塔や五輪塔の残欠があるので、何かを祀っていたと思われますが、伝承不詳です。



かわかみじんじゃ  
44 河上神社  
〈祭神 淀姫命・菅原道真〉

承暦元年(1077)に勧請創建されたと伝わります。境内には、「英彦山大権現 寛保二年壬戌年(1742)龍宿浦八月吉日中 講中」の自然石塔が神木の根元に建っています。



いしばし  
45 石橋

## 46 ろくじぞう 六地藏

龍宿浦・飯田間の尾根上にあり、「欽奉彫刻地藏大士、○辰・○泉・○圓。天文念五丙辰八月吉良日」と刻まれています。念五とは25を表し、天文25年は弘治2年(1556)のことです。



## いいだ 飯田

江戸時代は、佐賀本藩の親類である神代氏が知行しており、神代氏は佐賀郡川久保の知行主だったので、通常、川久保領と言われます。

おおしらとう もとうら おしがとう なかだ ぜんのうじ たていし はちがさか とうのたに くろう  
 大白藤・本浦・押ヶ当・中田・善王寺・立石・八ヶ坂・藤ノ谷・九郎  
 ざえもん なぎり いしほとけ やまのかみ かわち ゆりの どうて こぼだ ななまがり ま  
 左衛門・名切・石仏・山ノ神・河内・百合野・道手・木場田・七曲・麻  
 てびら ひらはたけ くまぞえ すがむ たかいげん いいだからみ いっぱんすぎ おおさき  
 手平・平畑・熊副・須ヶ牟田・海元・飯田搦・壺本杉・大崎の25小字  
 からなります。

## 47 とぐちじんじや 戸口神社〈祭神 手力雄命・菅原道真〉

飯田の人たちは、太良伊福の戸口神社を崇拝してきたが、坂路があり遠すぎて、朝夕の参拝ができないので、大同3年(808)戸口神社の分霊を勧請したと伝わっています。大正12年(1923)に元和元年(1615)勧請の天満宮境内を拡張して戸口神社を遷座し、合祀しました。戸口神社の額のある肥前鳥居には、紀年銘は無いものの県内で一番古い肥前鳥居と考えられます。また、正徳4年(1714)に23名の人が干拓をなしとげ、有明海の海神である御髪大明神を祀った記念碑があり、干拓の歴史を知ることができる貴重な資料です。



## やのうら めんぶりゅう めん 龍宿浦の面浮立の面(1対)

(市重要文化財)

龍宿浦区に伝わる面浮立の面で、口を開く雌面(阿型)と口を閉じる雄面(吽型)の1対。地元には、「氏神の小社に寝ぐらを求めた巡礼者が、里人の親切に対するお礼として1対の面を彫った。」という言い伝えが残されています。またこの面を動かすと雨が降るという伝説もあります。現在、市民図書館に保管されています。



## 48 ろくじぞう 六地藏



## いいだ めんぶりゅう めん 飯田の面浮立の面(1面)

(市重要文化財)

飯田区に伝わる面浮立の面で、口を閉じる雄面(吽型)。製作年代および作者も不明ですが、鼻の形など実に美しく、造形的にも優れた作品です。龍宿浦に伝わる面と同時期の300年前に作られたと思われます。



## 49 えんとくじ 円徳寺〈浄土真宗〉

肥前国高来郡島原の領主西郷純久の家臣に、木原対馬という者がおり、信仰心が篤く慶長元年(1596)に京都の本願寺に参詣し、出家得度して明玄と号し、帰国後円徳寺を建立しました。半鐘は天和元年(1681)に造られ、銘文は梅山人一鼎作です。この人物は佐賀藩士の石田一鼎のことで、石田一鼎の門人は『葉隠』で有名な山本常朝です。



飯田集落・中央が円徳寺

## 51 もとうら かんのんどう せきぞうろくじぞう 本浦観音堂の石造六地藏(市重要文化財)

本浦観音堂の境内にある石造六地藏です。竿石の正面には「逆修 庚申講中 現当二世願望成就砌 造立」とあり、側面には造立者の名前が刻まれています。その内容から、室町時代の永禄2年(1559)に慶林ほか14名によって逆修のために造立されたものであることが分かります。

「逆修」とは生前に冥福を祈ることで、銘文は「現世と来世の幸福を願い、その願いが成就されるように建立する。」という意味です。石造工芸品としての価値が高く、さらに当時の民間信仰の歴史を研究する上からも注目すべきものです。



## 52 もんぜん 門前エジャクサン墓

「陽○○禅師」塔身が欠失しています。造立年はないものの、形式からみて室町時代のものであると思われる、類例の少ない墓塔の一つです。



## 50 じぞう お地藏さん



## ゆりのやまきねんひ 百合野山記念碑



# 江 福



## え ぶく 江福

江戸時代は、佐賀本藩の親類である  
神代氏が知行しており、神代氏は佐賀  
郡川久保の知行主だったので、通常、川  
久保領と言われます。伊福村(現在の太  
良町)の一部に江福村があったようです。  
箱崎二・栗林・桑原・岩下・野田・藤  
内・野田日当・立石・浜田・江福搦・日当  
畑・白藤の12小字からなります。

## え ぶく あやたけかねぶりゅう 江福綾竹鉦浮立

第18回かしま伝承芸能フェスティバル(平成27年9月13日(日)開催)  
に出場しました。



## 53 鎮守神社〈祭神 手力雄命 応神天皇・猿田彦命・菅原道真〉

江福の人は、飯田から移住した人たちで、飯田の戸口神社の分霊を勧請しました。  
境内には「天照皇太神宮」(明和7年(1770))「八天狗」(天保15年(1844))、「大黒  
社」(明和7年(1770))の石碑があります。江福では彼岸の頃、社日※タン(さん)が  
あり、餅をついたり、ぼた餅を作って祝いました。社日タンは、米作りの神様とされ、9月  
に帰ると信じられ、遅く帰ると米がよくできると伝承されています。残念ながら、現在は中断中です。  
※春分・秋分にもっとも近い戌の日を「社日」といい、土の神と五穀の神をお祀りし、春の社日には、作物の成長を祈り、秋の社日には収  
穫を感謝して、家々で餅をつき神酒を供えてお祭りします。鹿島では江福にその風習が残っていました。



## 54 お地藏さんと石塔



## 56 弘法大師像

方形台上に、光背を負う半肉彫の弘法  
大師像で、太良伊福との境にあります。



## 55 石仏(江副観音堂)



## 57 澳髪大明神(元文4年(1739)造立)

基礎付の自然石塔です。「澳髪大明神、元文四年己未年九月吉祥日、庄屋弥太  
衛門、村目付○右衛門、三人百姓、善右衛門・文右衛門・五兵衛」と刻まれていま  
す。通常は「御髪大明神」と記されますが、  
「澳髪大明神」と記されているのは、飯田と  
江福の2例のみです。(写真右)  
写真左は、天満宮の自然石塔。



# や 矢 答

## 60 やこたえんぼうしよ 矢答展望所



標高450mの多良岳横断林道沿いにあり、眼前には多良岳の山なみと有明海、天気の良い日は対岸の熊本県まで望める、市内有数の絶景スポットです。



緑のルートは「多良海道」です。

## やこたえ 矢答

地名の由来は、その昔、武勇で知られた鎮西八郎為朝(源為朝)が頼まれて、龍宿浦の洞穴に棲んでいた大蛇を退治することになった。大蛇はそのことを知って、龍宿浦から多良岳に逃げようとしたが、為朝の弓矢に射止められてしまった。その時に射た矢が大蛇を貫き、勢い余ってこの地まで飛んで突き刺さり、大きな矢筈が響いた。それからこの地を「矢答」と呼ぶようになったという。

また、矢答地区から少し下った所に「矢立」という地名があり、矢が突き刺さった所。矢答の近くにある多良の「流矢」の地名は為朝の射た流矢が落ちたところだといわれています。

## 『多良海道』と『とんさん道』

佐賀から長崎に通じる街道(旧長崎街道)には、有明海岸沿いを通り鹿島・浜方面を經由し、矢答峠を超えて諫早へと向かう脇街道も整備されていました。この脇街道は「多良海道」あるいは、「浜道」「諫早街道」「湯江往還」などと呼ばれ、矢答峠は標高約400mの峠で、峠を越えて太良方面へ往還道が続いています。

実は「とんさん道」はこの脇街道のさらに脇道で、海岸沿いを結ぶ道です。しかし、海岸沿いは平野が少なく、起伏が激しいうえに入り組んだ地形であったため、多少登り道がつらくとも、多良岳の中腹を渡るほうがずっと近道でした。



## 58 やこたえ みず おきば 矢答の水置場

多良海道は、浜宿を抜けた後は山道となり、約5kmで矢答に着き、矢答峠を越えてからは多良宿に通じる山道を海へ向かって下りました。天保年間(1830~1843)の浜~矢答~多良の3里7町の馬賃は、一駄40貫(約176kg)までは186文でした。

浜や多良から登りきった所にある標高約400mの矢答地区は格好の休息地で、水小屋(水置場)があって、庶民はもとより幕府の巡見使や佐賀藩主なども立ち寄り、喉の渇きを癒しました。特に佐賀藩主が長崎警護のため往来する場合、この街道が多く使われたため、佐賀藩としても重要視していた地でした。

地元の人はこの道を「浜往還」とも呼び、現在でもその傍に清水が湧き出ており、そばの藤の古木が5月になると大きな花房をつけます。ここが水小屋跡といわれ、藤のそばに、貞享元年(1684)浜金屋町開村の人々によって建立された「山神石塔講中」の石碑があり、その石碑には「是よりただけみち」と記されています。側に「太良嶽参詣路」と刻んだ石の道標もあって、多良岳信仰の一端がうかがえます。



## みず おきば せきとう せきぶつ 水置場の石塔・石仏

一番右端の「苺萱宮」の石塔は、鹿島で唯一矢答にあり、石童丸の伝説で名高い高野山の苺萱堂との関連がうかがえます。



## 59 てんまんぐう 天満宮〈祭神 菅原道真〉

創建不詳。棟札によると、天満宮社は嘉永5年(1852)、御堂は明治12年(1879)建立とわかります。鳥居は、昭和32年(1957)に矢答氏子中から奉獻されたもので、コンクリート製です。



## ◎ ななうら さいじ 七浦ふるさと祭事

### ◎ おき しま 沖の島まいり(おしまさん)

七浦海岸から約5kmの有明海上に、「沖の島」と呼ばれる島があります。男島・女島からなる小さな岩礁で、干満の差で干潮時しか姿を現さず、現在は灯台が設けられています。この島には「御髪大明神」という祭神がまつられており、「御髪さん」あるいは「お島さん」と呼ばれています。



夏まつり

御髪大明神については諸説あって定説はありませんが、水神、特に雨乞い祈願に靈験があり、また航海や海の鎮守の神様として有明海沿岸の農民や漁民に広く信仰を集めています。有明海沿岸部の集落には、御髪大明神を分霊した「御髪大明神」「沖髪大明神」と書かれた石祠や石塔が祀られています。また、豊作祈願や雨乞いのために、沖の島へ浮立を奉納したり五の宮神社の神輿が渡御する、いわゆる「沖の島まいり」がたびたび行なわれた記録があることから、少なくとも江戸時代前期には御髪信仰が各地に浸透していたと考えられます。

現在、沖の島まいりは旧暦6月19日の夕方から20日の朝にかけて実施され、七浦地区の夏まつりも同時に開催されています。七浦海浜スポーツ公園(道の駅鹿島)に七浦地区の各集落から舟が集まり、海岸で浮立を囃しその後沖の島をめざします。この日、有明海沿岸各地からも多くの舟が沖の島に集まり、旗や幟で飾られた舟の灯火が海上にゆらめき、舟上では笛・鉦・太鼓の浮立が賑やかに囃し続けられます。まさに、有明海上で催される一大祭典です。



沖の島灯台

## ◎ ガタリンピック

日本一干満の差が大きい(6m)広大な有明海の干潟を利用した、干潟の上で行う運動会!鹿島市七浦海浜スポーツ公園(道の駅鹿島)で開催されます。



## ◎ 沖の島伝説

### かしまし 「鹿島志」 なべしまなおだ 鍋島直條 著

神様が髪をそられて海に投げ込むと、その髪が海中にとどまって島となったので、その島を「御髪島」となったと伝えられている。

### 「おしまさん伝説」

昔、おしまという親孝行の娘が、干害で農民が困っているのをみかね、神に雨乞いの願をかけ、身を有明海に投じた。間もなくおしまは沖ノ島で死体となって発見され、おしまの願いがかなって、恵みの雨が降り、豊作となった。それからおしまを豊作の神として祭るようになり、沖ノ島をおしまにちなんで「おしまさん」と呼ぶようになったという。



## ◎ おんがみ 七浦地区に祀られている御髪さん

各地にある石祠は沖の島の御髪神の分霊です。御髪信仰は沖の島が祭神であるため、古くは航海神、水神として漁家の信仰が中心であったと考えられます。しかし、時代を経ると、水を必要とする農業神としての性格も合わせ持つようになり、それに風浪神としての性格も加わり、複雑な信仰の形をもつようになったと思われます。

- ・西葉 (路傍) 御髪大明神 寛文4年(1664)
- ・母ヶ浦 (鎮守神社境内) 御髪大明神 承応3年(1654)※市内最古
- ・嘉瀬ノ浦 (七浦公民館付近) 御髪大明神(伝承のみ)
- ・龍宿浦 (路傍) 御髪大明神 延宝6年(1678)
- ・飯田 (戸口神社境内) 御髪大明神 正徳4年(1714)
- ・江福 (路傍) 御髪大明神 元文4年(1739)



母ヶ浦



嘉瀬浦



飯田



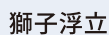
ほうこ

き げん

し まい



面浮立・かけうち



ふじ つ

1. 4. 1.

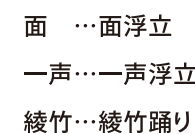
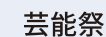
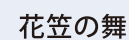
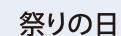
か せのうら



ちわめき



※鹿島伝承芸能フェスティバルフォト



鉦 …鉦浮立  
獅子…獅子浮立  
新 …新地節

# ななうらちく のこ きねんひ ~七浦地区に残るさまざまな記念碑~

明治になって近代化が進むにつれ、人々の生活も豊かになり、産業も発展していく中で、地域として後世に伝えるため、記憶に留めておくため様々な理由で記念碑が建てられます。七浦地区に残る災害関係記念碑、土地の開発に関する記念碑、地域の発展に尽くした人を顕彰する記念碑など、その代表的なものをいくつか紹介します。

## さいがいふっこう きねん ひ ◎ 災害復興記念碑



埋築記念碑(大宮田尾)

大正3年(1914)8月25日に発生した高潮で、有明海沿岸の堤防が決壊し家屋や耕地が大きな被害を受けました。災害からの復興にあたっては現状復旧ではなく、区民で協議し沿岸部の埋め立てを計画し、大正7年に工事が完成した経緯が記されています。



災害復旧記念碑(飯田) 昭和25年建立

昭和24年(1949)8月に発生したジュディス台風(台風9号)は九州各地に甚大な被害をもたらしましたが、飯田区でも飯田川・日当川の氾濫により深刻な被害をもたらしました。区民は速やかに復興に取り組み、翌年には護岸工事が完成しました。



災害復興之碑(母ヶ浦) 昭和49年建立

昭和37年(1962)7月8日に発生した集中豪雨により、母ヶ浦川が氾濫し、護岸・橋梁などが押し流され、家屋や田畑が水没するなど、甚大な被害を受けました。区民一丸となった復興事業は4年の歳月で完成しました。7・8水害の記憶と復興の歩みを伝える記念碑です。



本浦旱害揚水記念碑 昭和42年建立

昭和42年(1967)の8月中旬~10月中旬の約2か月間ほとんど雨が降らず、佐賀県は深刻な旱害に見舞われました。市内でも主要農作物である米とみかんが大打撃を受けました。飯田の本浦地区ではこの被害をうけ、飯田川から送水する施設が急遽設けられました。

## とち かい はつとう きねん ひ ◎ 土地開発等記念碑



ゆりのやま 百合野山記念碑(飯田) 明治43年建立

明治維新後、政府に接収され国有林となっていた百合野山の払い下げを記念して、建てられました。飯田区の豊かさを象徴する百合野山は、小野和久等の努力によって飯田区に払い下げられ、共有地となり、区に豊かな収益をもたらしたと書かれています。



多良岳開拓完工碑(飯田) 昭和56年建立

未開発の山林原野にみかん園を造成し、農業経営の規模拡大をはかった多良岳開拓事業は、わが国最初の国営パイロット事業で、昭和39年に着工し昭和56年に完工しました。



七浦干拓土地総完工碑(七浦開拓) 平成元年建立

戦後の緊急開拓事業の一環として、昭和21年度に開始された七浦干拓の整備は、40年以上の歳月をかけて、干拓工事・地区内整備・排水整備、土地改良事業が完成しました。

## じんぶつ けんしやう しょうとくひ ◎ 人物を顕彰する頌徳碑



なかむらりやうけん 中村良謙墓碑文(音成) 大正10年建立

こうか 弘化元年(1844)生まれ。音成の中村家9代当主で、初代七浦村長です。早くから村内の農業や教育に力を注ぎ、学校用地を寄付するなどしました。また鹿島銀行の頭取として鹿島・藤津地域の産業経済の発展にも尽くしました。のちに貴族院議員となりました。

※頌徳碑的墓碑



おのかずひさ 小野和久翁頌徳碑(飯田) 昭和10年建立

げんじ 元治元年(1864)生まれ。区長、村会議員等を歴任しました。村の殖産興業に力を入れ、田畑の区画整理、荒地の開拓につとめ、また、飯田駅の誘致や飯田～矢答間の道路整備など、村の発展と村民の生活向上に尽力しました。百合野山記念碑にもその名があります。



なかむらかんじ 中村寛治翁頌徳碑(嘉瀬ノ浦) 昭和21年建立

明治4年(1871)生まれ。音成の中村良謙の養子となり後を継ぎました。明治39年に七浦村長となりその任期は昭和20年まで、実に40年に及びます。七浦の基幹産業である農業の振興はもとより、交通の発展、村の生活の向上、教育にも尽力しました。



なかのまきこ 中野万亀子先生頌徳碑(太良町伊福) 昭和9年建立

明治5年(1872)生まれ、旧鹿島藩士中馨治の長女、田中鐵三郎の姉です。佐賀県最初の女性教員となり、伊福の大地主中野権六と結婚後は、自宅に中野夜学会や中野家庭寮(花嫁学校)を開設したほか、地域婦人会を育成をするなど、女子青年の教育に生涯を捧げました。

※伊福は、昭和30年(1955)まで七浦村でした。